

デレブ・ジ・アンバサダー / エチオピア

DEREB THE AMBASSADOR / ETHIOPIA

1. Mewuded Lemejemer 恋をはじめするには

2. Awudamet 一年に一度

3. Alem 世界

4. Ken Sichelim 日が沈めば

5. Hilme Mado 遠く夢をみる

6. Anchi Liji ねえ、おまえ

7. Ebo Lala エボ・ララ

8. Ethiopia エチオピア

<アルバム『エチオピア』>

待ちに待ったデレブ・ジ・アンバサダーの新作アルバム『エチオピア』が届いた。伝統と革新のなかで揺れ動き、自らの音楽的な枠組みを、さらに、エチオピア音楽のかたちを更新し続けてきた男の新たな挑戦である。バンド名を冠したアルバム『デレブ・ジ・アンバサダー』（2011年）からの流れを汲む妖艶なエチオピア音階とタイトで野太いプラスセクションの絡み、うなるようなボーカルは健在である。また、エチオ・ジャズの巨匠ムラトゥ・アスタケの楽曲を想起させるエチオピア音階とラテン音楽の融合や、国民的歌手マハムドゥ・アフメドゥのソウルフルな歌等の影響もうかがえる。後半は、1970年代初頭、ハイレ・セラシエ帝政末期の名曲のユニークな解釈もあり、たいへん興味深い内容となっている。

ここでまず、1曲目から5曲目にかけてのデレブによるアムハラ語歌詞の日本語訳を紹介したい。

① Mewuded Lemejemer 恋をはじめにはそれはかならずはじまる かならずはじまる

愛したい人はそこらじゅうにいる
恋したい人はそこらじゅうにいる
でも関係が続けるって難しいね
愛の生活にどっぷりひたりたい
たとえ心を明け渡しても
愛を返してくれるひとはいない
ああ愛に生きたい ああ 愛がほしい
ねえ運命をつかさどる神様
まっくらやみのなかで間違った判断をしないで
ねえ神様、目をみて、目をちゃんとかぞえて
正しい判断をして
(いつかちゃんとした相手を私に与えて)

② Awudamet 一年に一度
新しい年が 我々にとって希望に満ちたものでありますように
年に一度の祝祭を敬意とともにむかえよう
この祝祭を幸せに 健やかにむかえよう
さあ 古い年から新しい年へ
勉強、仕事、結婚、家庭、平和、健康、我々にとって不可欠なもの
人生の道のりが
安全で安定したものになりますように
新年の明るく希望にあふれた朝

都会にもいなかにも
良いニュースが届きますように
愛による共存 我々の生活は新しくなる
他者のものよりも先に
我々の文化をまずは大事にしよう
家族から離れているものたち どうか長生きし
これからもたくさん新たな年を迎えよう
さあ敬おう カラフルないでたちで この文化を
さあ敬おう 我々の国エチオピア
明るい笑顔と輝き

③ Alem 世界
世界に想いをはせる
満たされた気持ちと 満たされない気持ち
満たされた生活をしているはずなのに
何かはまだ足りない
満たされていないと信じ込み さがしまわる
せつかく恵まれているはずなのに
まだ充分でないと思ひこみ
歯と笑いかかみ合わず 心から喜べない
今持っているものに満足すれば
探し求めるものをみつけることができるはず
健やかな愛に満たされたいならば
神に祈り感謝しないといけない
悩ままくっても いずれ 朝日はのぼるのさ
自分自身を見つめれば
自分がいかにめくまれているかがわかる
すでに持っているものの価値を認めれば
目的を達成することができるはずさ

④ Ken Sichelim 日が沈めば
日が沈み 暗くなった
寝る支度をし ベッドに入る
お前が恋しくてお前の名を呼ぶ
夢で逢うだけでは不十分
ホンモノのお前に会いたい
お前の美しさはとても魅力的
お前の体はすべてリアル 人工的じゃない
ほんの少しいいから ホンモノのお前に会いたい
夜の夢の中だけではなくて 目の前に現れてほしい

⑤ Hilme Mado 遠く夢をみる
遠く夢をみる ここにいながら
霧に包まれ 何もみえない
夢のなかでみた町を 訪れてみたい

よびかけても 誰もこたえてはくれない
私ははてしない夢見人
遠くを想う ここにいながら
夢のなかでみた町を訪れてみたい
よびかけても 誰もこたえてはくれない
夢でみた町 誰がそこに導いてくれるのかい
私の心はそこにある
私の心はその場所をかけめぐるのさ
そこに行けないのなら
どうか私を夢から覚まさないで
夢よ去れ 夢などもうみたくはない
私に希望はない

私はついに今日ここへもどってきた
(夢から覚めた)
私は幸せ 私をあたたく迎えて
どうとう夢から覚めることができたのさ
愛に満ち溢れた気持ち
私は愛を渡すはしご
愛で輝く街に戻ってきた
私に来るのを待っていた
私は夢から覚めた
夢の世界から現実の世界に戻ったのさ

狂おしい想い、やるせない男のブルースが心の底から絞り出されるかのような歌の世界である。これ以降6曲目から8曲目にかけてはエチオピアのポピュラー音楽シーンの巨匠たちの名曲のカバーである。歌詞は割愛するが、6曲目はエチオピアの音楽シーンでは珍しいアコースティックギター弾き語りのスタイルで知られるメスフィン・アベベの往年の名曲“Anchi Liji ねえ、オマエ”。7曲目は帝政期から現在にいたるまで、セイフ・ヨハネスをはじめとする数々の歌手たちにカバーされてきた“Ebo Lala エボ ララ”。この歌にはグラゲという民族の言葉とグループが取り入れられている。そして最後に、伝説的な歌手ギルマ・バイエイネの代表曲“Ethiopia エチオピア”（原題は「Enen negn bay man nesh “私よ”というのはいったい誰?」）。ギルマは1970年代を代表するロックシンガーであるが、80歳近くになった現在、フランス、ブダミュージックによるEthiopiquesシリーズの世界的なヒットによる、エチオピア音楽ブームの波に乗り、フランスのジャズ・ロックバンド、Akale Wubeとのジョイントツアーで欧州の音楽シーンをにぎわせている。デレブは近年のエチオピア音楽の世界的な評価の流れを強く意識しながら、よりファンキーなアプローチで、これらの名曲に新たな息吹を与えているのである。

<デレブの歩み>

さて、ここでデレブ・ジ・アンバサダーの中心人物である、デレブこと、ンデレブ・ゼンネバ・デッサレイについておおまかに紹介したい。デレブは、エチオピア北部の古都ゴンダールから南へ30キロほど下った場所に位置する楽師アズマリの村ブルボクスに生まれた。晴れた日には、小高い丘の上から青ナイルの源であるタナ湖がみわたせる、デンビア地方ののどかな農村である。ここブルボクスで人々は、畑を耕し、牛や羊の放牧を行い、エチオピア新年や祝祭儀礼の季節に楽器をたずさえ、あるものは男一人で、あるものは夫婦で、付近の街々へ音楽活動を通した出稼ぎにでかける。音楽活動を生業の柱とする者が集住しているという事実を除けば、エチオピア北部にどこでもあるようなこの農村。近年は、多くの著名な歌手を輩出したアズマリの村として、全国的に知れ渡るようになった。

そもそもアズマリとは何者か?エチオピア北部においてアズマリはマシニコ（アズマリたちの隠語では“ティンカブ”）と呼ばれる弦楽器を弾き語り、地域社会の祝祭儀礼や庶民の娯楽の場において歌う芸能者として親しまれると同時に、社会的には被差別的な職能者として位置づけられてきた。彼らは、17世紀にはじまるソロモン朝ゴンダール期から、諸侯が乱立した群雄割拠の時代にかけて、王侯貴族お抱えの宮廷楽師として、戦場で兵士を鼓舞する歌い手として、あるいは庶民の意見の代弁者として活躍した。また1930年代、イタリア軍による侵攻時は、歌を通した社会的な扇動者としてレジスタンス活動を行ったことも報告されている。アズマリは、時には為政者によりそい、時には権力者、支配者に徹底的に抗い、エチオピアの歴史の変遷のなかで、したたかに生き抜いてきたのである。

アズマリの家系に生まれ育ったデレブ。父親や兄弟はマシニコやアコーディオンを奏でるアズマリで、母親も唄い手であった。物心ついた五歳の頃には、ゴンダール市内の結婚式などで演奏を行う両親についてまわり、みようみまねでマシニコを演奏し、音楽の技能を身につけていく。10歳になった際、彼の一家は首都のアジスアベバに移住する。デレブはいろいろな酒場や娯楽の場で演奏を行い、時には一人で、時には妹とともに、路上を行き交う流しの芸人のようなことをやったという。そのうち、カサチンス地区のアズマリ音楽専門の有名な

ナイトクラブ、ボレルウウォチ（現在は閉店）の専属歌手として研鑽をつむようになる。デレブはその店の常連客であった、オーストラリア人女性と結ばれ、音楽活動の拠点をオーストラリアに移すことになる。しかしながら、生活の習慣が異なるオーストラリアにおいて、カルチャーショックを受け、移住後7、8年はほとんど満足な音楽活動を展開することができなかったのだという。そのようななか、エチオピアとオーストラリアを行き来しながら、2003年に“Wollo（またはBanchiw Mejen）”というシングル曲をリリース。ウォロ地域の農村の生活への憧憬が歌われるシンプルな曲が、エチオピア国内で大ヒットしてデレブの名はたちまち全国的に広まる。その後、エチオピア国外のオーディエンスを意識して2006年に発表したアルバム『Drums and Lions』は、デレブによるマシニコの弾き語りと、ニッキー・ボンバによるパーカッションが絡む名作となっている。エチオピア北部の伝承曲や、天折した伝説のアズマリ、アサファ・アバテの楽曲のカバーなどを含み、自らのアズマリとしての出自を冷静に直視しつつも、アズマリの誰もが到達しえなかった、音楽的境地に達している。このアルバムは、彼をWomadをはじめとする、いわゆる“ワールドミュージック”の舞台に押し上げ、デレブは世界をツアーすることになる。その勢いに乗り、オーストラリアのミュージシャンたちとDereb The Ambassador を結成。バンド名を冠したアルバム『Dereb The Ambassador』（2011年）は、マシニコの演奏やアズマリ特有の楽曲は影をひそめ、野太いプラスのグループ、妖艶なキーボードの演奏が前面に出され、ここにおいて楽師アズマリから脱皮するのである。職能者としての伝統の継承という責務、エチオピア社会からアズマリにむけられるスティグマとのたたかい、音楽的創造への野心と情熱。様々な想いや感情が絡む中、オーストラリアにもエチオピアにも安住の地を見いだせないことから生まれる葛藤。それはすなわち、デレブという類まれなアーティストの創造の源泉そのものであり、デレブ・ジ・アンバサダーによる本作『エチオピア』の通奏低音ともいえる。その内なる葛藤から生まれたハイブリッドなエチオピアン・グループに乗って、さあ、おもいっきり踊ろうじゃないか。

2018年9月 川瀬 慈


http://www.ahora-tyo.com/